

江戸名所圖會之九

ル 4  
3218  
9





伊州

四谷

四谷 四谷 門の外より西の方内藤新宿のあり 逆の惣名之里  
老云此地の四方は谷あり故に四谷と号する  
南向亭云く昔麴町  
六七丁目の地と塩町北

野

野 野 續 曠原あり 此所彼所小土民の家四家あり 故  
四家と云へり 共の事跡合考は往古今の尾州公成屋敷表門の地及び  
高井戸の方より四ツ家と稱し往來のやせあり 鳴子  
此地ハ永祿の頃霞村とよひくると云はる 或云往古此地ハ武蔵

牛頭天王社

牛頭天王社 同所傳馬町一丁目二丁目の間の左側の横小路を入る  
二丁斗を西より 故に俗字して此小 祭神素盞鳴尊 本此地佛の  
本は四谷の人家用けく 路を天王横町といふ 神主ハ芝崎氏の神田明神 別當を寶藏院  
号を 寶仙寺 野 祭禮ハ毎歳六月十八日同所石切町 傳馬町二丁目の  
の横町と云

昭和九年  
七月六日  
晴





社王天頭牛之谷四





旅所へ神幸ありて廿一日帰興を地主ハ稻荷明神に  
共ニ此地の産土神と崇む本地ハ十一面觀音  
行基大士の作也

鬼子母神 同所坂の下南寺町日蓮宗日宗寺に安置せり當寺日  
蓮宗

水谷ニ在て兼蓮寺と号を此地へうつれて後藤堂大學頭高次の室高見院に  
月日宗大姉の法号を採て山を高見と号し寺を日宗と唱へ其家より寺院  
再興あり本々鬼子母神の像ハ日法上人の彫像なり相傳ふ

文永元年十月三日日蓮上人四十母君を拜せんとし日里安房

國小湊に歸る母君悦の餘り頓死を上人大々歎て生活祈

念をせんとし先従弟日法上人に命じて此本を造らしむ依

此本を祈願し此本を祈願し此本を祈願し此本を祈願し此本を祈願し此本を祈願し

の事四年あり鎌倉住人鎌田氏某此靈像を傳來せしが本

の靈亦より享保十三年當寺に安置せり

妙典山戒行寺 同所南に隣る日蓮宗より延山に属せり

寛永の頃迄ハ糶町一丁目の沓堀端にありて常唱題目

修の庵室なり近隣宮重氏庵主と共に力を合せて

遂に一寺とて當寺の日貞師ハ山本勘助晴幸入道道鬼

齋り孫ゆて延山日悦上人の徒弟に寛保中八十餘歳當寺ハ明

曆に至り此地に遷り徳門の額に妙典山と書せし朝鮮

國李彦の書に此所の坂を戒行寺坂又其下の谷を戒行

寺谷と唱へり

分身鬼子母神 寺中圓立院に安置せり定朝の作に始四谷北伊賀町  
神田安齋との医師の家に傳來を來由ハ長久保

夕干觀世音菩薩 同所南寺町戒行寺の裏の坂口真言宗

錦敬山真成院にあり此本を越後國村上義清守佛ハ

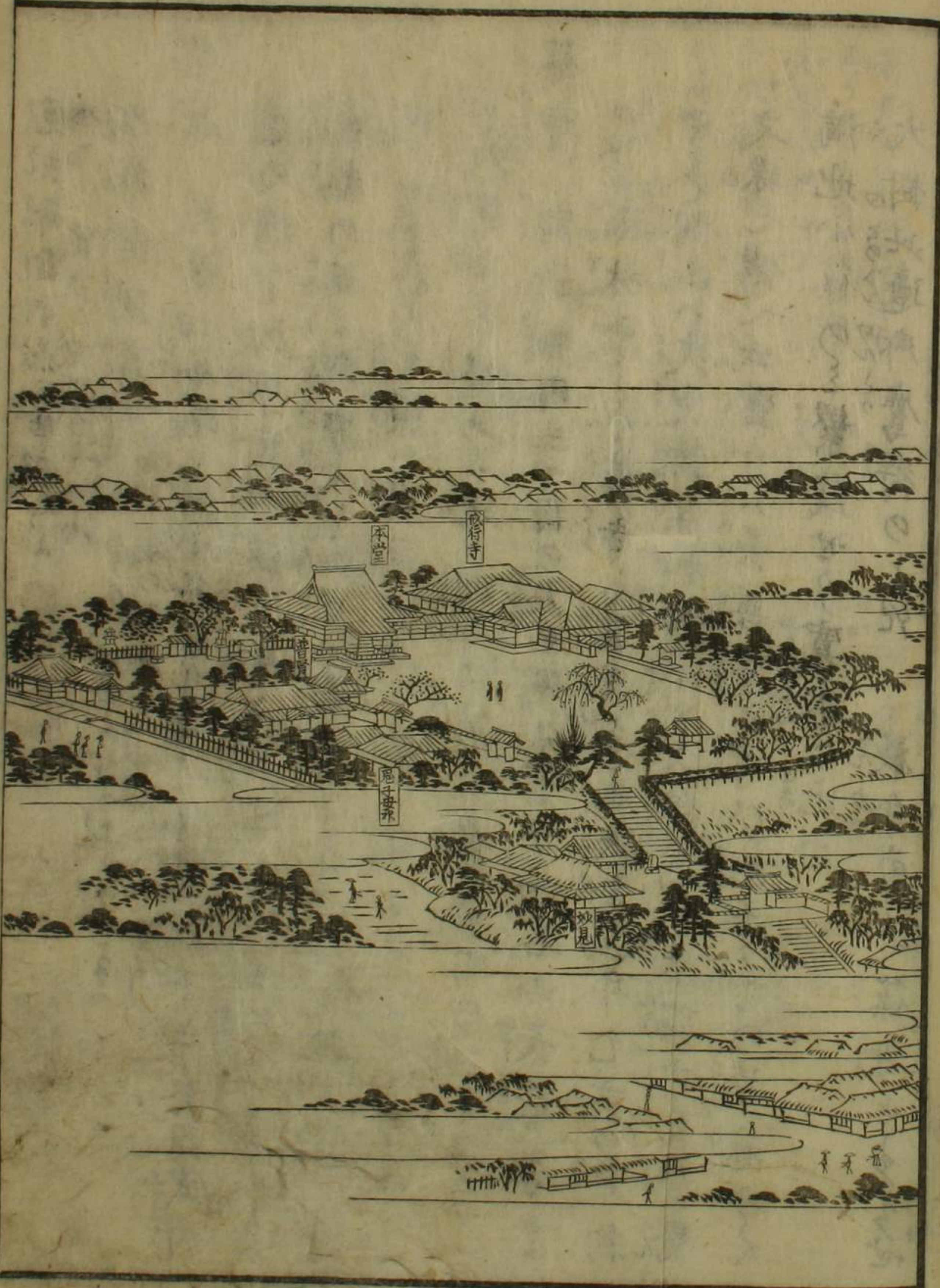
其未流村上兵部入道道樂齋大坂沓陣の時上杉

景勝に後ひ奥州米澤より彼地を趣く後江戸に歸り

當寺に収むるといふに或人云く此本を塩踏觀世音と号す  
賴清常ニ崇信し其後堂宇を造り安置せり大坂沓陣の時上杉

賴清常ニ崇信し其後堂宇を造り安置せり大坂沓陣の時上杉





日宗寺  
 戒行寺  
 志月ひさしん  
 汐千観音



寛永寺三世祖心

本尊聖観音此作着詳一尺斗の石の上に立せり

忍原 同所四谷通りの小名あり傳へ云寛永十年癸酉武州

勤番の面々御家人を江戸へ召歸せし此地は地々宅地を

賜ふされと云頃ハ廣原あり故に字は忍原とを呼ぶ

と也忍川と唱ゆる地ハ四谷の通り傳馬町の西あり

篠寺 同所盛町三丁目の左の側は有る四谷山長善寺

とる禪林中々篠寺ハ其異名也天正三年乙亥の草創

中々閑山ハ文叟憐和尚本堂ハ释迦如来脇士ハ普賢

文珠へ傳へ云當寺ハ長善庵と呼び形をその草菴ゆ

満地小篠の繁茂せり寛永の比

大樹此邊御鷹狩のと記 嚴命ありて篠寺とよませ

篠寺とつてハ四谷盛町の通り道より左の傍あり長善禪寺と号す昔伊放鷹の頃尚寺の庵室々々満庭小篠の繁茂せりハ篠寺とよませあり

其燈を永世に標せり





あひ此地を寺境あり後此名あり故に平證として今も  
堂前より方三尺斗の地は小藤の隈は總門の額に世寺と書  
せし永平寺兼天和尚の筆なり

四谷大木戸 又大関戸 又大関戸 甲州及び青梅への街道なり 土俗云霞ヶ関

或ハ旭の関を云と登御入國の頃迄ハ此地の左右ハ谷あり  
一筋道あり此關あり往還の人を糾問せし近頃を江戸

あり附物も駄賃馬の荷物送状ありきと通さざりしとなり

今も猶駄賃馬の荷鞍をかきと江戸宿又ハ荷問屋等此手

形を出して通る其遺風あり此故やこれ番屋ハ町の

持あれは突捧指戻鍬ホを飾置る是往古關のありし時の

遺風あり又同所西の方北往還の道を横より石橋此

下と右へ流る小溝を櫻川とあり

内藤新宿 甲州街道の官驛あり 此地ハ旧内藤家の第宅の地也  
江戸宿屋とある故に名とす

日本橋より高井土造の行程凡四里餘あり人馬共より

を依り元祿の頃此地の主人 官府の許へて新驛舎を取立る

故に新宿の名有り然りとて故有りて享保の始廢せし

又明和九年壬辰再び公許を乞ふ驛舎を再興し今を繁

昌の地とあり 此地より高井戸へ 追分といふハ同所甲州街道ハ  
一里廿五町あり

王子通及び青梅ホへの分道ありハなり

霞関山大宗寺 内藤新宿右側中程大木戸より二丁餘あり

浄土宗ゆへ縁山は屬を本寺ハ阿弥陀如来ハ惠心僧都の

作開山念誓故心学玄和尚と号昔ハ多門のうある草菴あり

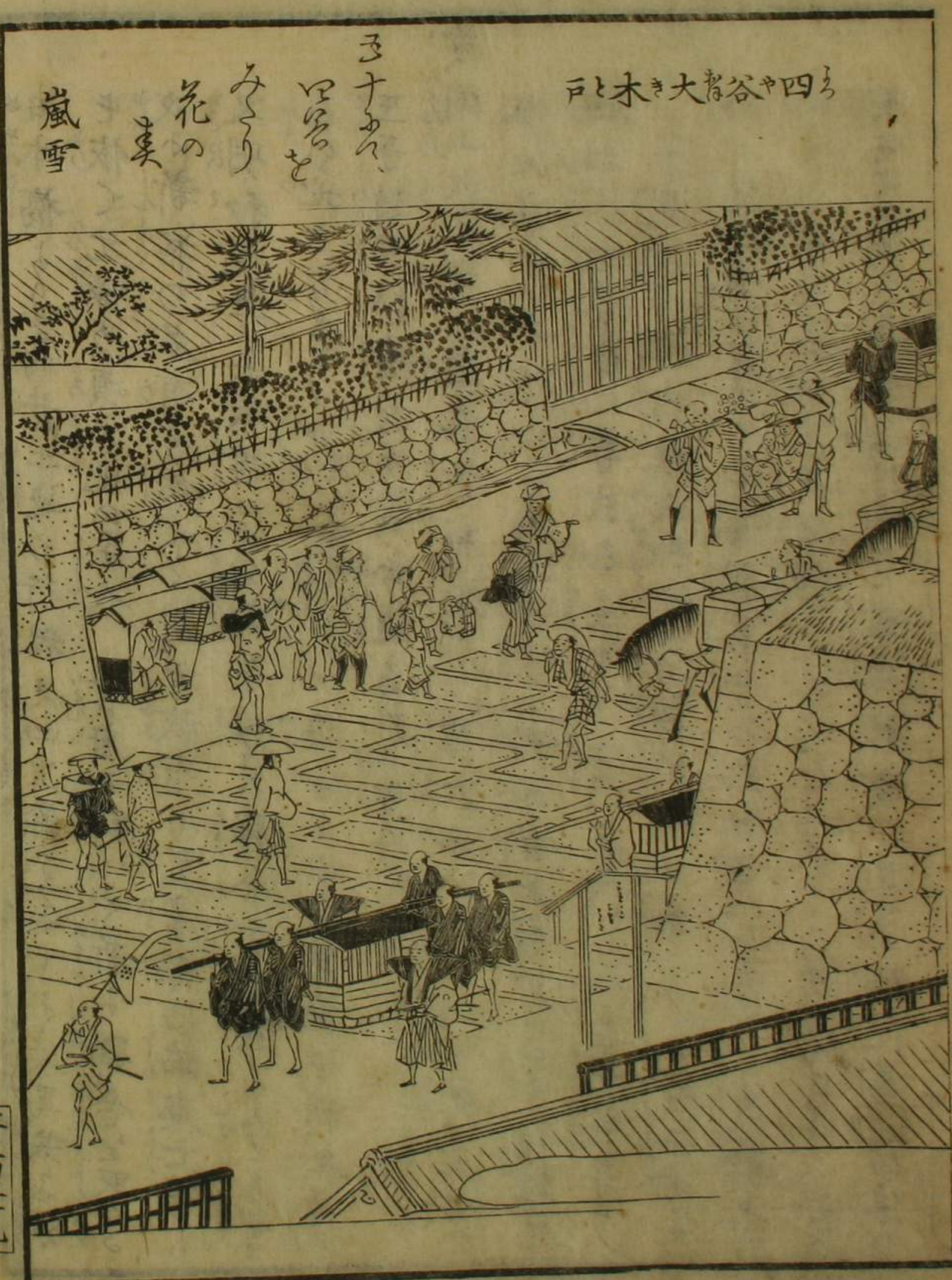
と寛永の頃内藤大和守重頼此地を賜りて時此地に

住る道心者ありて重頼若干の地を与へりて廣路あり

以て大宗なりと云へる重頼よりありて當寺牌堂の如き

付ありてありと号とすと當寺牌堂の如き弥陀善逝の像ハ

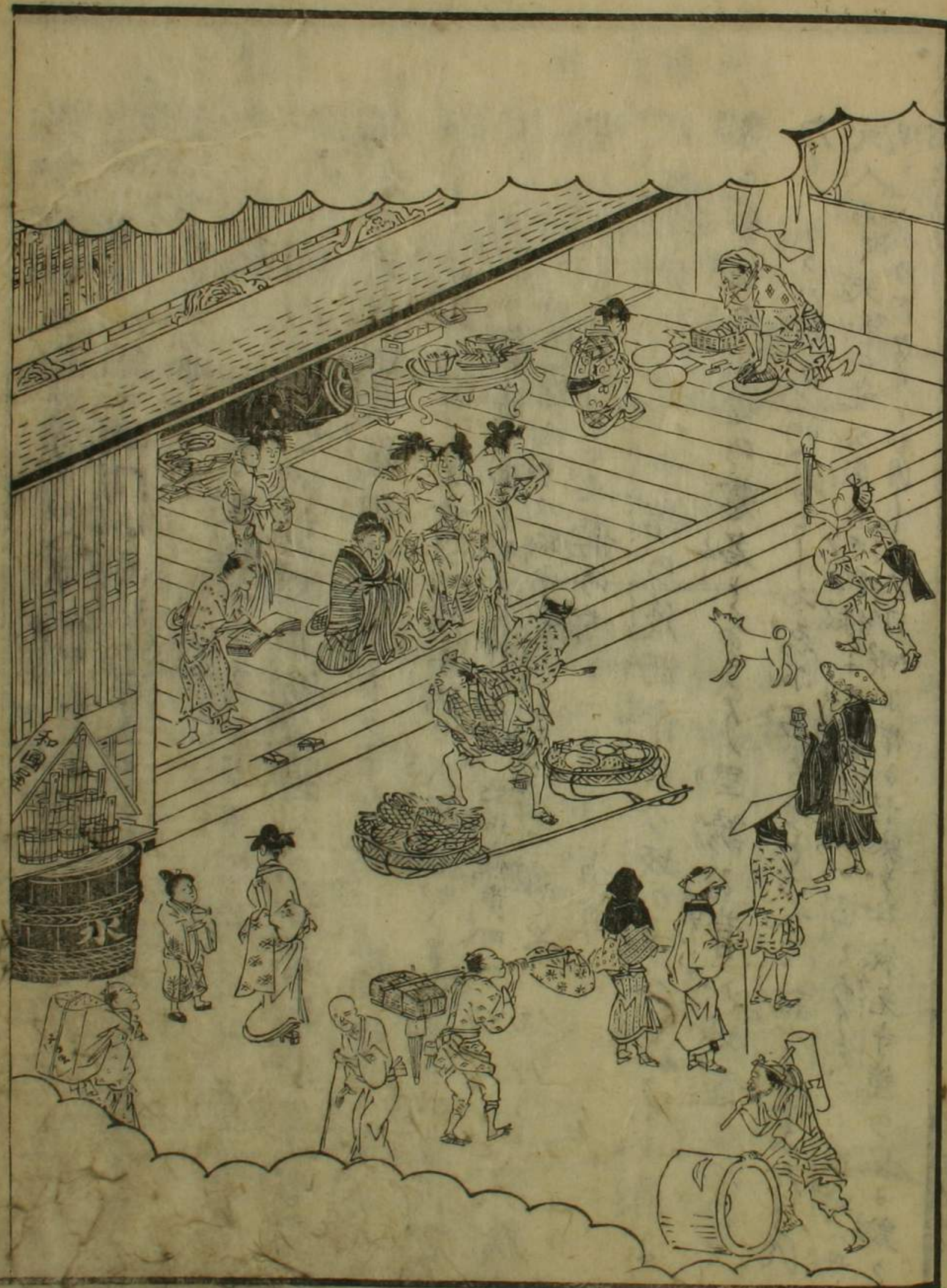




四谷大木戸

五十  
四  
花の  
嵐雪





四谷  
内藤新驛

師走  
の  
風  
を  
か  
か  
せ  
て  
は  
な  
せ  
な  
し







鳥の跡

永固山一行院 藪河橋の西の方千日谷せんぢつたにに在り浄土宗じやうとじゆうの  
 開山ハ源蓮社本誓利覚和尚りきやくわうしやうとの慶長年間草創くさくわうを昔ハ  
 僅わずかの草庵くさいんなりしと永井家開基ひらきし一宇いつうの淨刹じやうせきとを関  
 山利覚和尚ハ則永井信濃守尚政しやうせいに仕へたり刺涿せつたくし  
 此地このちは庵いんをむきひ千日せんぢつの洞常行念佛じやうじやうぎやうねんぶつとを結願けつがんの時千日  
 不退轉ふたいてんの面向めんきやうを勤む依より道俗群集だうじやくぐんしゆせしより千日寺せんぢつじと  
 唱へ又此玉このたまを千日谷せんぢつたにと呼よびたり  
 阿弥陀佛銅像あみだぶつどうざう 推太原浄家長禪寺おしはらのじやうぢやんじ境内けいんに在りきりさ五尺ごせき  
 ちりちり佛像ぶつざうの脊せに應永十四年丁亥八月廿五日おうえいじゆしよねんていげいはつげふにぢごにぢと彫付うづてあり  
 旧東本願寺きゆとうほんがんじの佛ぶつゆき大坂おほさかの御城内ごぢやうぢにありしを寛永かんゑいの頃  
 江戸えどに移うつり當寺あたゐらに安置あんぢせり

推太原  
 長禪寺









按は應永十四年足利將軍義持の時世なり佛軀をかくと云あり疑ふ  
昔兵討の時損せしものありん故  
吾妻堤 同所あり往古の街道の餘波なりとて堤の形念

僅に残るのみ

大神宮 同所涉焔硝倉の西の方より有る相傳の萬治年間

關東大は疫疾流行を富士の根方より神送りし此地

祭のぬ然し其神輿の中は太神宮の所後有り依て此地

鎮護の為同所八幡宮の地は祠を建て是を勸請を此地

遊女の松 同所西小隣は天台宗寂光寺の境地は有り

當寺昔ハ鄰町の貝塚の地はありし元祿の頃天台宗は改む今の

相傳ハ自證大僧都圓雄師あり

相傳ハ此地ハ往古の奥州街道ゆゑ廣豁の原野ありしハ

此松樹の鬱蒼とて栄茂し遠く見え渡りしハ亦霞の

松と号し寛永の頃 大樹此地は涉放鷹の時鷹翦て

涉氣色ありかりし此松はありし涉拳は止る故ハ褒賞  
とて其涉鷹の名を此松に命せし遊女と唱へし先

新日暮里 同所二丁とて西南の小川を隔て法雲山仙寿

院とて日蓮宗の寺此庭とありしと此辺の地勢とよひ寺

院の林泉の趣谷中日暮里は似て頗る美觀なり故ハ日暮

里は相對して假初ハ新日暮と字せり弥生の頃爛漫と

花の盛るふハ大ハ群集せり當寺ハ紀州公御母愛養珠

院日心大姊正保紀元甲申草創あり當寺の鬼子母神ハ

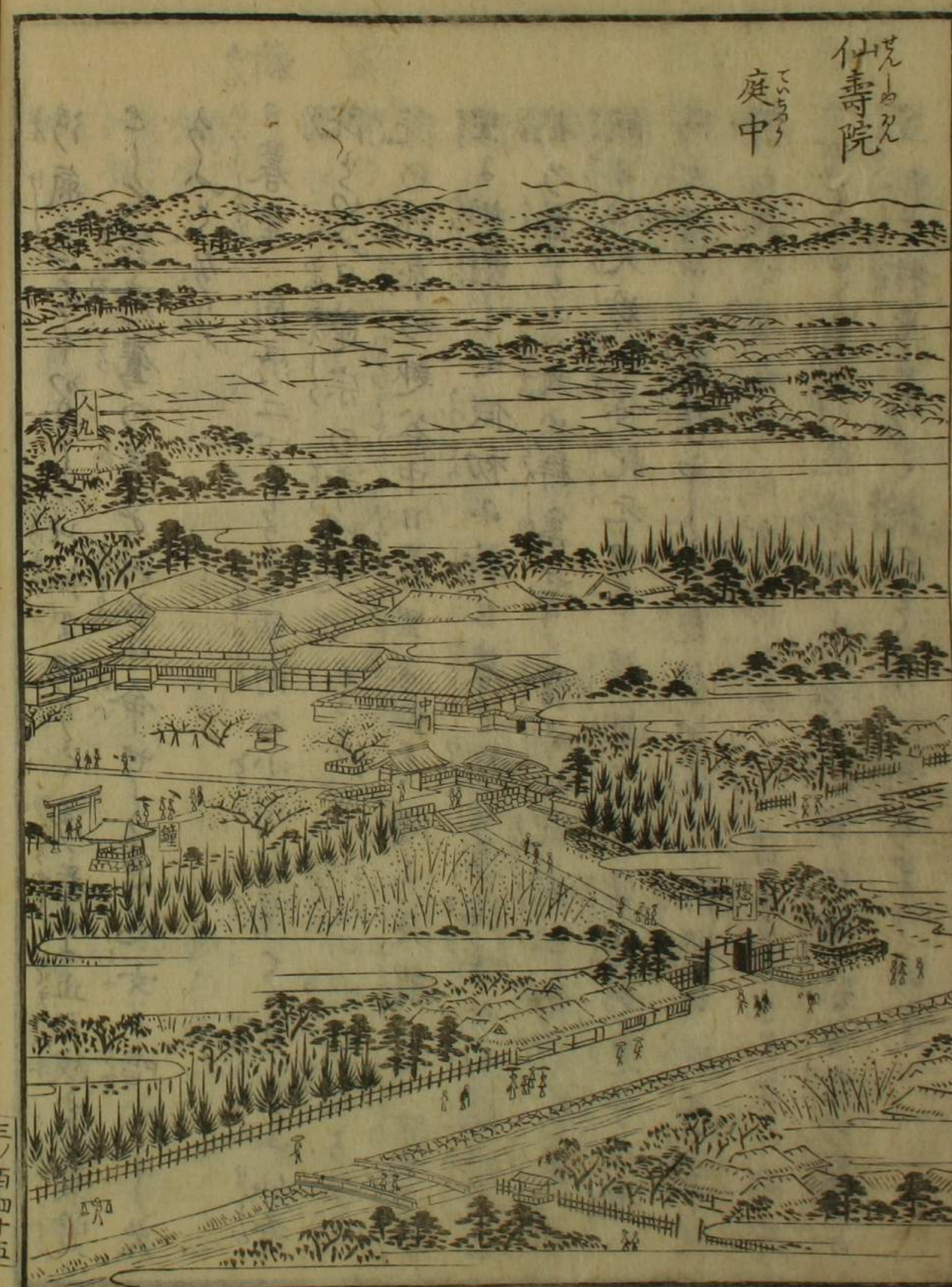
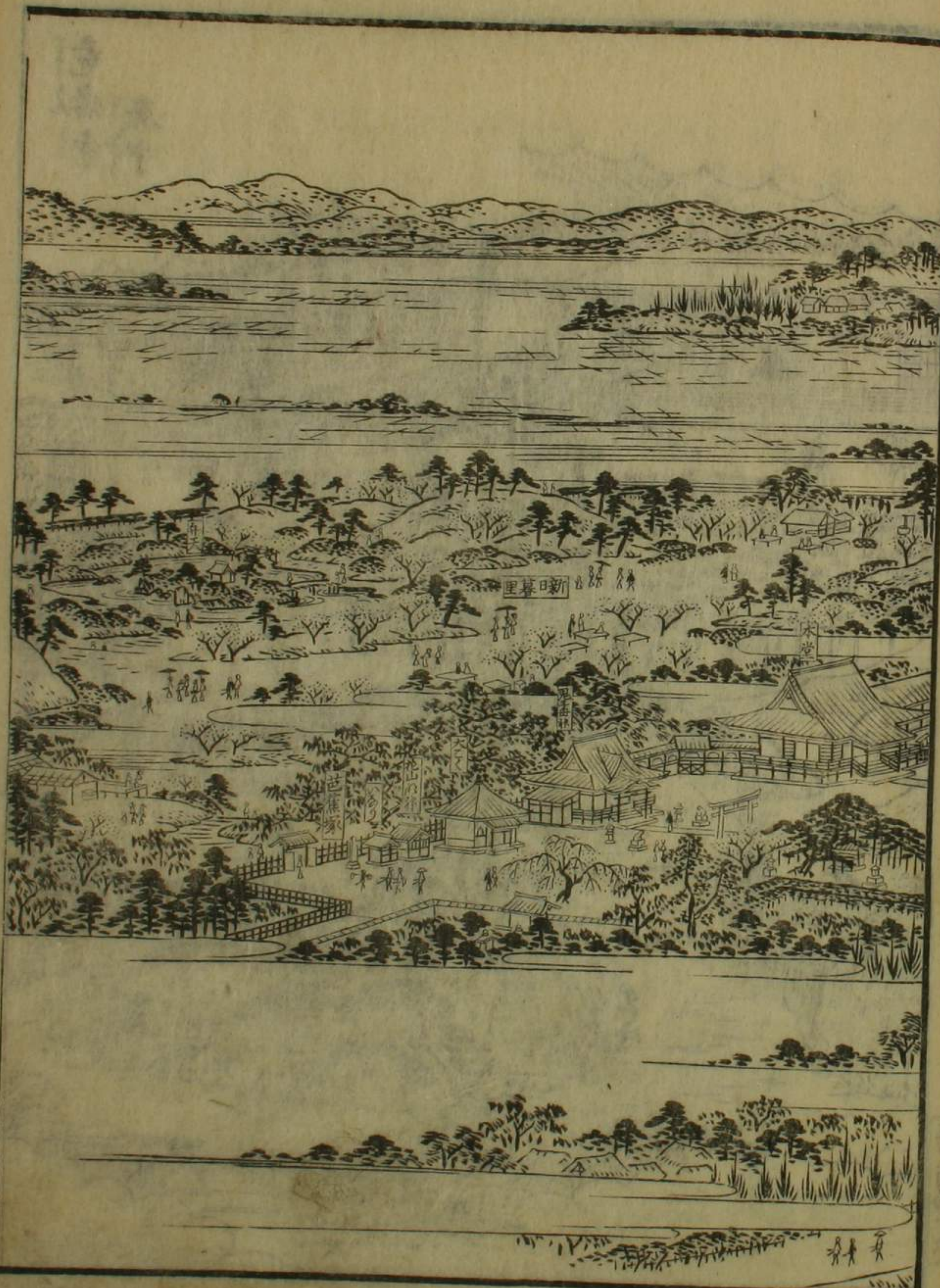
同大姊甲の延嶺ゆゑ靈ルと感し大野の辺ハ土中に

得られて後當寺開創落成の日安置ありしとあり同所

一町とて東南龍岩寺とて濟家の禅宗の寺の庭中ハ

笠松と稱するあり枝のまろり三間ありしと





仙壽院  
庭中





龍岩寺  
庭中





千駄ヶ谷観音堂 寂光寺より二町をかり西北の方よりありと観

谷山聖輪寺と号する真言宗の寺に安置也

本尊如意輪観音ハ當寺開山行基大士の彫像也

三尺五寸ありと世俗目玉の観音と字にあり

往古慶長三年の春盜賊來り此

堂宇を再興す此は里民目玉の観音と字にあり

縁起曰神龜二年乙丑行基大士東國遊化の頃同年初夏

暫く此地の息ひあみ時ハ如意輪觀世音傍の谷より

出現し多し大士ハ聖尔ありと依り佛意ハ應にかこみあり

古株を佛材とす此を彫刻しなる故小觀谷聖輪

の号ありとの事

千駄ヶ谷八幡宮 同所一丁許西よりありと此辺の惣鎮守也

例祭ハ九月廿七日あり別當ハ真言宗高雲山瑞圓寺

と号す 鈴懸松 門前ハ松の老樹有寛永の頃大樹此地ハ故鷹の時

社記云往昔此地深林の中ハ時と々々瑞雲現し又

或時碧空より白氣降り雲上ハ散り村民怪むと彼

林の下ニ至るハ忽然と々々白鳩數多西をとりて飛され

依り其靈瑞を稱し小祠を營み名つけ鳩森と云貞觀

二年慈覺大師東國遊化の頃村民等大師ハ鳩森の神

跡を乞求む依り宇佐八幡宮城州鳩の嶺ニ移りあり

古を名ひし神功皇后應神天皇春日明神等の尊を

作り添て正八幡宮也 崇りあり遙ハ後久寿年間渋谷

正俊領地ニ鎮座の神なるを以り金丸生前隨身の

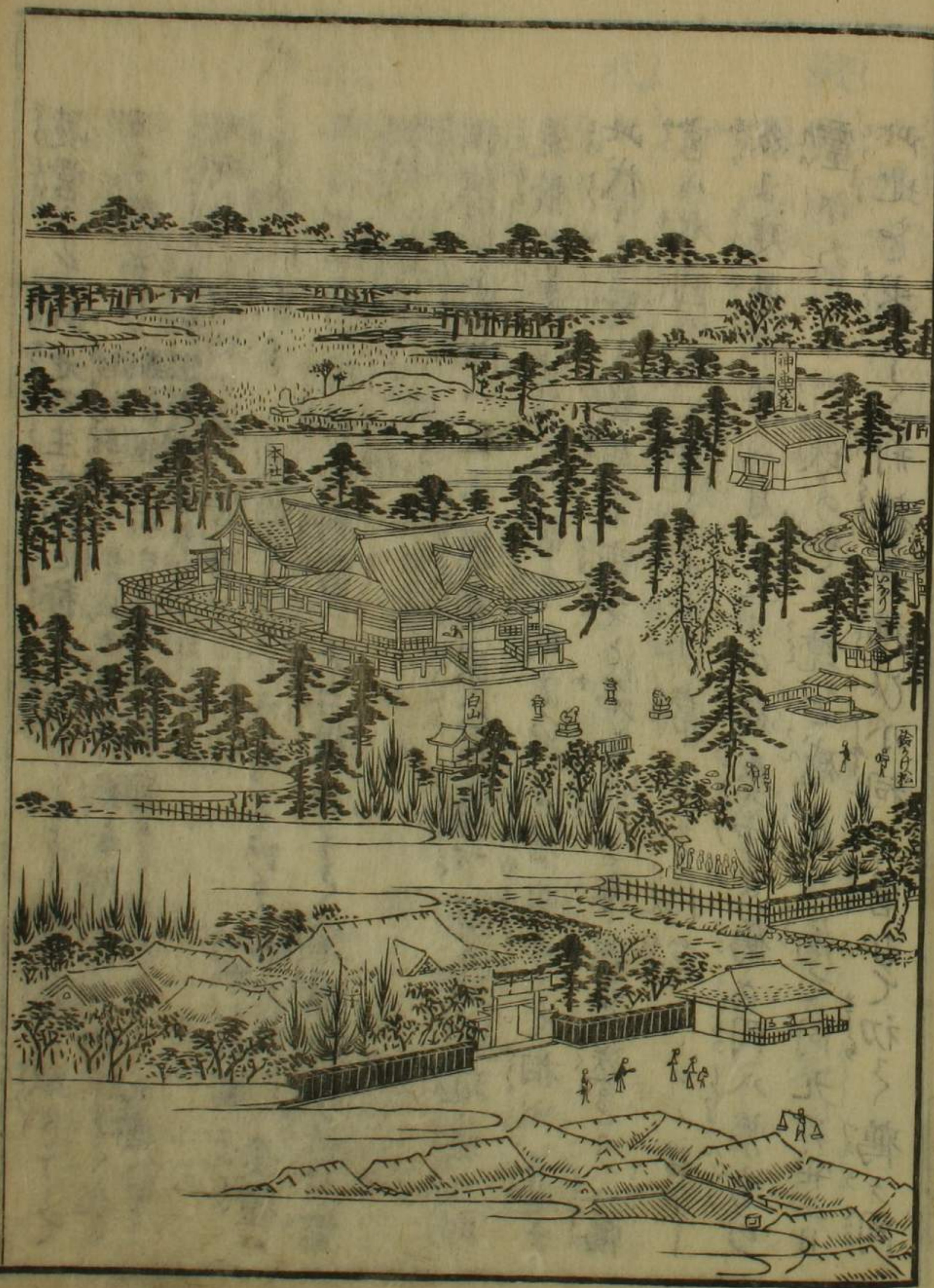
本尊惠心僧都の作の弥陀如来の像を本地佛とす社を





千駄谷  
観音堂





千代  
八  
幡  
宮



造營して此地の生土神と稱し、（此の地は）靈應ハ照ミとて  
日ノ新あり（南無向亭云々）當社の前路ハ鎌倉街道の田路（中）今も  
所領の中ハ北条家分限帳島津經四郎（此の地は）大聖へかり  
代々木野八幡宮 同西の方代々木野は河を（此の野も武藏）祭禮ハ  
九月廿三日は修治を別當ハ天台宗中々宝珠山福泉寺智  
妙院と号を（古ハ和明）

相傳ふ當社ハ往古源頼家公の旗下なりたる近藤三郎  
是茂の家人荒井外記智明とて若故ありて相州を退き  
此代々木野ハ蟄居し宗支と名を改め年月を送り八幡  
宮ハ本國の産土神とあり常々信怠るるなり  
然レ建曆二年八月十五日の夜夢中ハ鶴ヶ岡八幡宮の  
靈ハありて宝珠の鏡を感得せ依て同九月廿三日  
此地を求むる荆棘を拂ひ小祠を營む初々鶴ヶ岡

八幡宮を勸請し（此の地は）

鞍懸松 同所の岡ハ在り傳へ云源義家朝臣奥州征伐の

頃此地ハ陣を取此松樹の枝ハ鞍をわけらとて（此の）

代々木橋 甲州街道萩窪の立場より三丁あり先の方松

原赤堤泉廻り代々木等の五箇村入合の辻ハありて曲折する

橋下ハ水流 橋上ハ土を覆ふ形頭（此の橋下ハ）

高井戸 此の甲州街道中々驛舎あり（此の驛舎ハ）

西ハありて小田原北条家の分限帳ハ大橋氏某の所領に

無連高井堂とあり（無連ハ）

和奇ハ兼四巻堀兼井の築下ハ詳なり





代々木八幡宮



三五五十一











此川の流のまはるといふ布を流さハ海まで

又云 此の川は古と称する地あり是れ古狹き所の家多くありて洞布を流す

又云 此の川は古と称する地あり是れ古狹き所の家多くありて洞布を流す

此の川は古と称する地あり是れ古狹き所の家多くありて洞布を流す

布多天神社 上布多驛舎の辺より右の方四丁をわたりあり別當ハ

真言宗中々廣福山采法寺と号し 浅尾王禪 祭禮を隔年

九月二十五日修す當社祭神詳ならず今菅神を相殿に 勧請し二座とて當社昔ハ多磨川の岸頭ありし洪水の

難ハ罹りの後今の地へ遷すあり 今も此地ハ元天神と稱す

延喜式神名記曰 武藏國多磨郡 小祠を祀せりとあり

虎拍神社 同所北の方十丁計を隔て佐須村あり 佐須村ハ古

武藏國風土記曰 武藏國多磨郡拍江郷 所祭大歳御祖神也

延喜式神名記曰 武藏國多磨郡 所祭大歳御祖神也

宗深大寺は属せり當寺ハ天平勝宝二年庚寅深大寺の満功

上人開創する所の佛域なりとて本尊ハ立像二尺計の弥勒

虎拍山祇園寺 同所三丁をわたり東の方あり日光院と号す天台

宗深大寺は属せり當寺ハ天平勝宝二年庚寅深大寺の満功

上人開創する所の佛域なりとて本尊ハ立像二尺計の弥勒



青渭社  
虎拍社



如来の本佛と安置す作者 赤祥 本堂の向拜の掲る所の虎拍山の  
三大字ハ筆者と云々

薬師堂 本堂の前方より薬師佛ハ立像師長一尺  
そとありて行基大士の彫造なりと云々

此堂宇二百有餘年と云々前迄ハ此地より東南の方三四十  
歩を隔て耕田の中ありと云々

賊の為ニ佛器の類ひと奪れりハ終ハ祇園寺の境内より  
遷せしと云々

江入道旧館地 祇園寺より良の方六七町を隔て二百歩あり

の岡なり空堀の形なりと云々嚴然と云々残り此地ハ入道崇む

所の稻荷の小祠あり土人里の稻荷と稱す祠前極の老

樹一株六圍あり存せり東鑑ニ云元二年戊辰七月十五日

武蔵國威光寺領内ハ乱入し田を刈狼藉小及ふ由虎拍の像圓海



柏江入道  
旧跡  
祇園寺

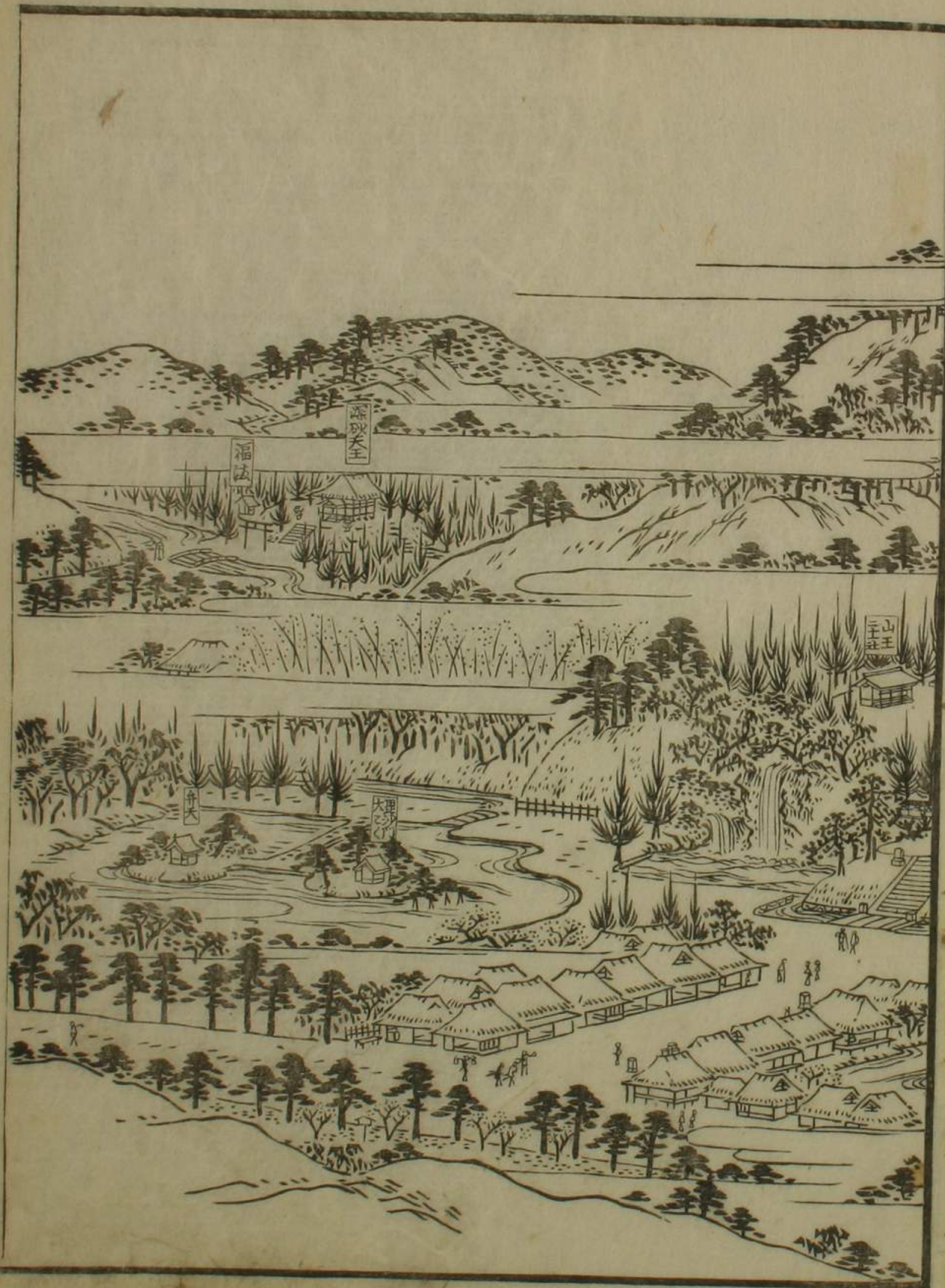


訃の物語のついでに、本村柏江小作の柏江を誤りたるものありん又云  
 十一月七日二品入落供奉の人名の内小野平四郎と云ふ名を主す  
 按て、賈日本後紀小野天皇の義和十一年甲子五月武蔵國多磨郡柏江  
 郷より節婦を以てすを載らしむるなり、本村柏江小作の柏江を誤れり  
 せり、武蔵國風土記殘編にも多磨郡の内は柏江郷といふ地名を平  
 和名類聚抄中、同郡の郷名は柏江とあり、古が江と訓す、此  
 地を今、佐須村と稱し、あつた多磨川の北字奈根村、此  
 地を今、佐須村と稱し、あつた多磨川の北字奈根村、此  
 郷中、本郷太田新六郎知多の郷の郷記あり、此郷井の口地あり、  
 青渭神社、虎拍神社より北の方深大寺村の中あり、土人  
 此地を字々天神、谷戸と云ふと祭神詳ならず、世々  
 青波天神と稱せり、相傳ふ古ハ社前ハ湖水あり、  
 青波の稱ありと社前楓の老樹あり、数百餘霜を經る  
 延喜式神名帳曰 武蔵國多磨郡  
 青渭神社云云  
 按て神名帳は青渭とあり、今本阿遠伊と訓す、土人云古當社の前ハ湖  
 水満々あり、故ハ青波の稱あり、今青波小作、阿遠葉と訓す、ハ  
 楓あり、ふ似たり、後同卷青沼明神の条下と意照て、

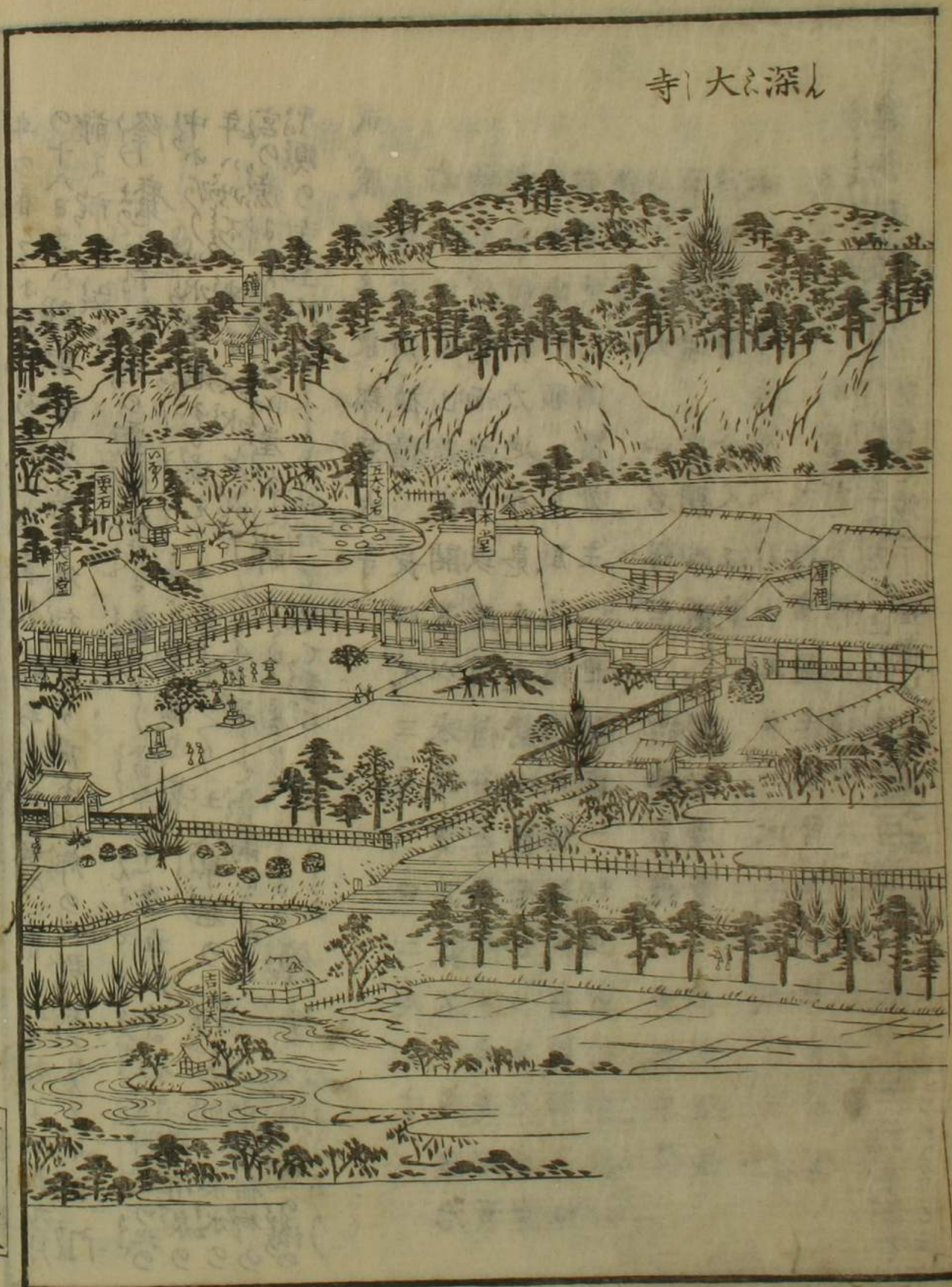








深山大寺

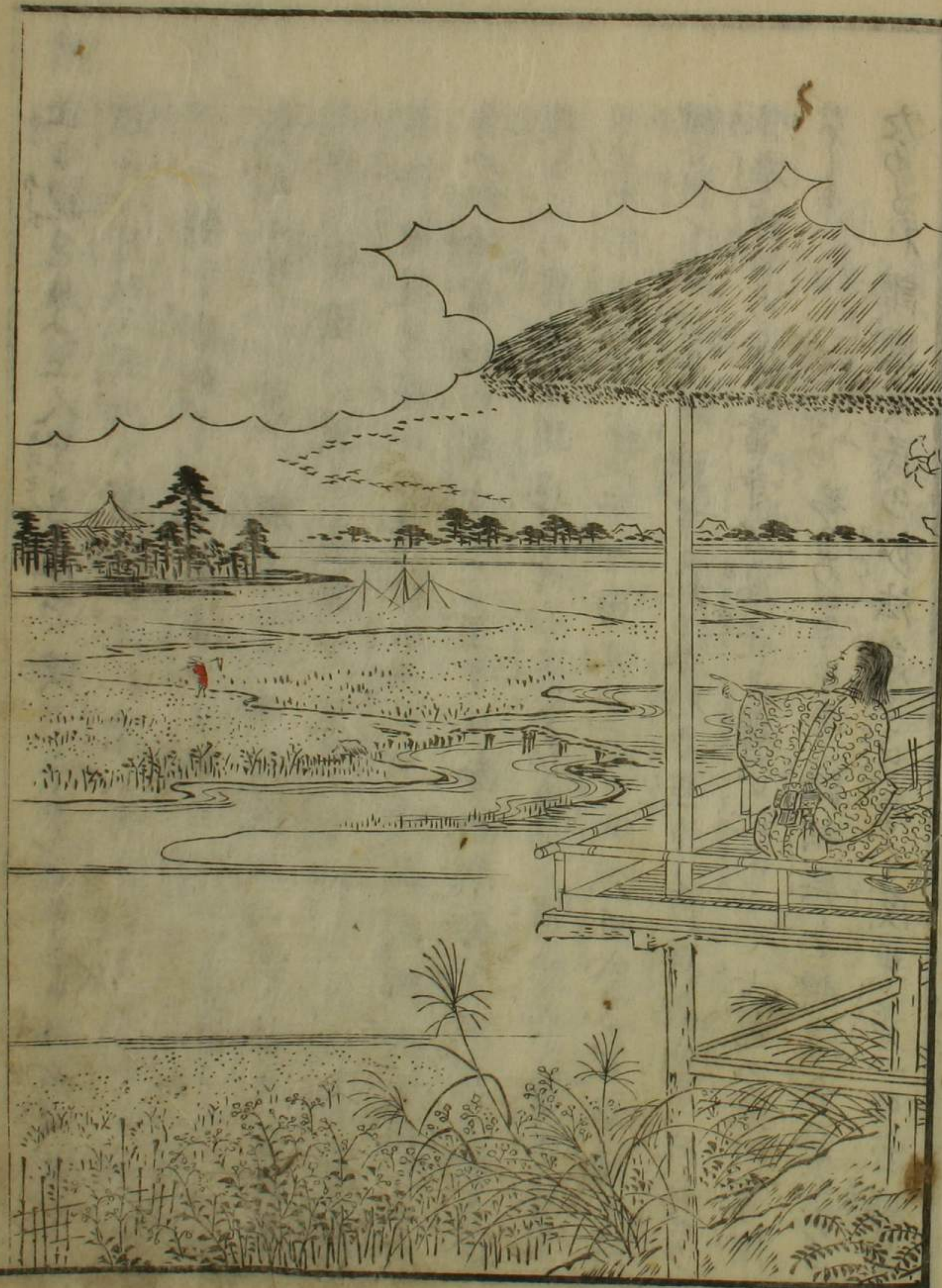




毘沙門天吉祥天社 昔各別社ありしを後天の相繼ふ合祭す  
の童女とあり祭す相繼ふ天平五年癸酉滿功上人此地に當社を  
深砂大王社 大門並木に相對す縁起曰天平五年癸酉滿功上人此地に當社を  
東照大権現宮及び八幡 深砂大王影向池 社に影向あり住古深砂  
八幡 権現宮と相繼ふ  
立石 當國の國分寺に至り不動の利劍を虚空に擡りひく此石  
上立り此号ありとありあり 福満童子祠 深砂大王の祠前 仁王塚 祠前  
の道を一丁歩を西へ登り塔を塔と云ふ 往古塔なりありあり  
二王塚と字す相傳へ昔河某の子當寺二王門の邊にありあり  
姿を見失ふ人々を尋ねて一山に大駭動すありあり當寺二王門の邊にありあり  
野見の智を着せし門を破却し土中埋りありあり二王塚の号ありと  
玉の像と云わく門を破却し土中埋りありあり二王塚の号ありと  
縁起曰 聖武天皇の御宇武藏國多磨郡柏野村に獵師あり  
柏野村今佐 名を右近と云ふ年頃山に水に臨むに殺生を業と爲  
須村と云ふ 名を右近と云ふ年頃山に水に臨むに殺生を業と爲  
ある時やむことあり女来りて妻とある名を虎と云ふ 此妻  
常小夫をとりて殺生をとくむ右近の妻のいふ隨ひ竟よ

狩漁を止むを後一人の娘をもちけりつとてかつとて大くあり  
早く生長あり然る福満と唱ふる童子ありて此娘は逢初  
これハ父母大に怒かをりて賤し人よあをせんり本意ありを  
とて二人の中とせげ娘をハ此里の池の中島に家を営みかこふ  
居しむ福満ハ日毎岸に至り是を歎くことハもかひなし昔  
とろこの玄井三藏渡天の時流砂川に至りて佛を念せしハ  
深砂王現き多ひ川を涉り多ひ子を思ひて一心念しこれハ  
一の靈龜深く出ぬ福満を甲に乗る島に至り娘はあまを  
得たり父母後此事を聞て神明の冥助ありてを知り隨喜  
して娘を福満の妻ありせられハ竟一人の男子をもちて父母の  
願ゆりて此兒出家し滿功上人と云ふを後とろこハ渡り大衆  
法相の旨を傳へて帰朝し天平五年癸酉父の本誓により  
深砂大王の社を建立し當寺を創し是時神靈水中に岩





深大寺蕎麥  
 中寺の蕎麥  
 味ひを  
 佳り  
 都下  
 稱と  
 你大  
 夢と  
 とり





上より現るる上人其容を摸くとめんともよみ衣本なり  
然中七月七日玉川小靈木の流れ漂ふあり則是をばく薬師  
佛三昧を彫刻し一昧を當社に納む餘二昧は下野國日光此由  
巖間小達しこれハ廢帝の御宇勅願所小定られ浮岳山深  
大寺と震翰を灑き扁額をよみ又貞觀年間武藏國司藏  
宗卿叛逆を巖山の惠亮和尚より仰々乱賊降伏を祈らる  
あり和尚當國の國分寺に至り不動の利刃を虚空に投り  
傾るるの勝地を道場とせむと誓ひあり小遙小飛く當寺并泉  
の辺の石上より傾ぬ此石を劔立の石と云依五大を勧請し此  
地小於て秘法を修煉せられし行力空りしは逆徒悉く降伏せり  
依層感のあり當寺を惠亮小賜ひ此所より七邑の地を寄附  
なりあり七邑と唱ふあつありしより法相宗を傳し台宗あり  
たれれ護國安民の秘法怠るるなく無銘長四尺関東第一の密場と

かゝるり 昔ハ十二字の塔頭あり大伽藍ありしそ後野火の災に罹  
り灰燼とありしと世田谷の吉良家深く信し再  
堂宇を営み波平行安の刀を寄附す五寸あり  
繪卷物并詞書二卷 参議右中将藤原公尹卿筆  
抑當寺ハ関東融通念佛最初弘通の道場なり慈眼  
大師 大猷公の上聞小達し此念佛ハ大原の良忍上人現ハ融通念佛百遍を  
受させ賜ひ忝も結縁の名帳小御諱を記させありぬるハ  
當寺融通念佛の縁起小詳なり此念佛ハ大原の良忍上人現ハ  
此法や或ハ十返百返乃至千返万返を日課とし我唱ありの稱名の功德  
他の人の為と他の人の唱ありの稱名をハ自らの為とす互ハ融通し自他  
平等は修徳の功徳廣大無辺なり由縁起小音鞍馬山の毘沙門  
天王もこの念仏の徳縁小入ありしありし由縁起小音鞍馬山の毘沙門  
大寺蕎麥 當寺の名産とす匙を産する地裏門の前此名を冠り  
真とすもの甚少し今近隣の村里より産するものありし此名を冠り  
難波田彈正城址 深大寺大門松列樹の東の方の岡を云土人を



城山と呼ぶ今ハ麥畑とあるところも此所彼所ハ湍池の形  
残り此地ハ往古 清和帝の御宇藏宗卿武藏國司  
より一時こゝに住せられり 旧館の跡あり天文の頃上杉  
朝定の家臣難波田彈正忠廣宗松山の城の出張としてこゝに  
城廓を構へり

北條五代記曰く上杉修理太夫朝興の嫡男五郎朝定生年十三歳なりて家を  
繼武州深大寺とつる古城を再興し北條氏綱目引矢の企むるあり  
とつる奈下ハ七陣ハ天文六年されハ松山に中ハありての田のいづれハ  
難波田ありてありて松山とて難波と北條於ハ山中に據りて  
よせ一首ハかくそとていへり

と備前難波田もこゝにありて武士ありてをいへり  
我作りの所ハ古今集の詩とありてありて返答ありての所ハ松山ハありて  
置難波田とこれハ松山ハありて  
浪もこゝにありて身と全ハありて忠臣の法といへりありて作者といひ功者といひ

深大寺城跡 深大寺佛堂の後の方の山續中へて間六七丁と  
隔り空堀或ハ柵門杯ありりと覺りて形今猶嚴然たり

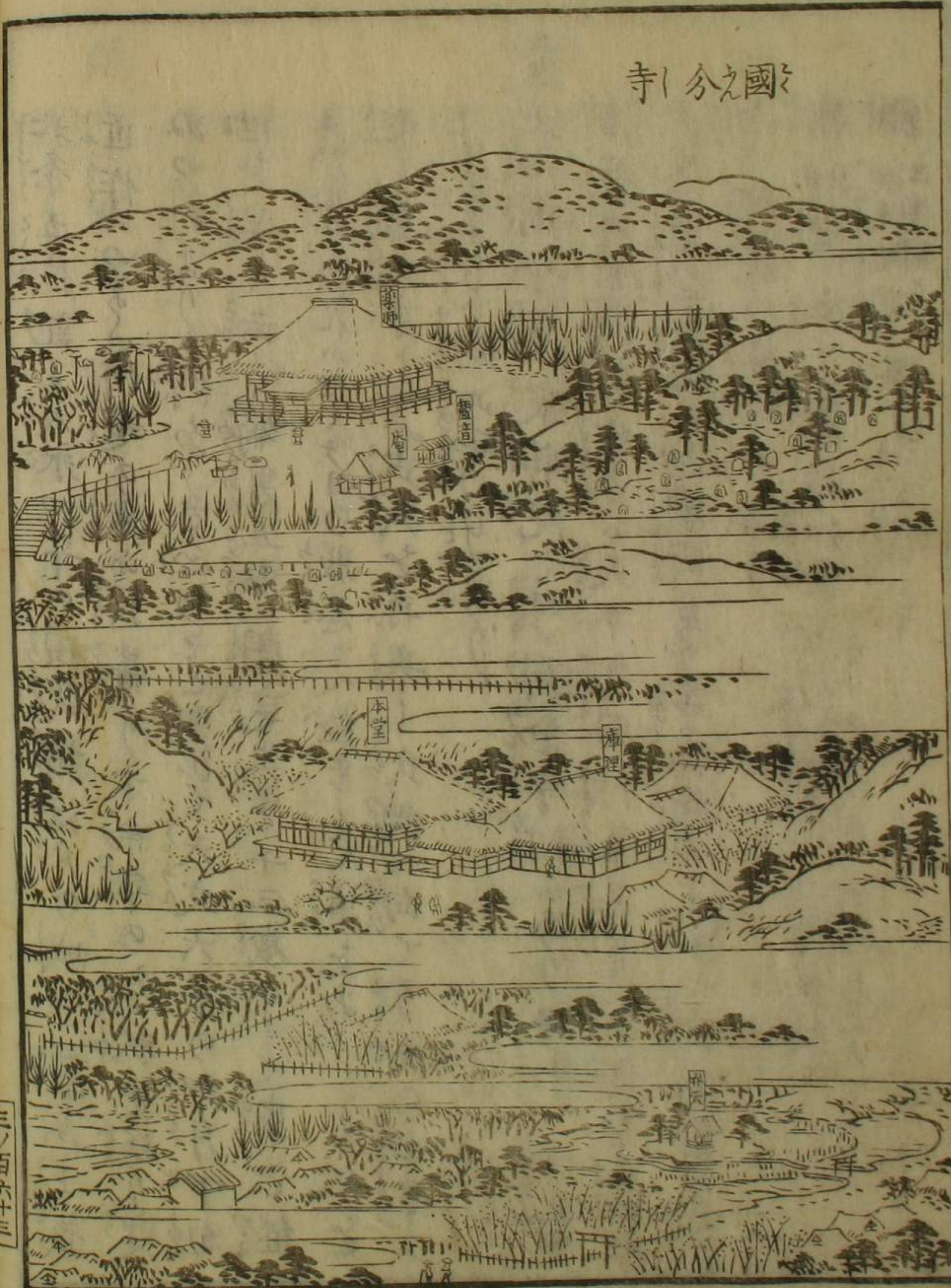
北條五代記ハ大永四年の頃氏綱江戸の城を襲ふ上杉  
匠作ハつる河越の城ハ引籠り十余年の春秋を送り迎へ  
ぬつりより例ありす心ちをいひて天文六年の卯月下旬  
世を早く去る嫡男五郎朝定生年十三歳なりて家を繼  
あひぬてのれハ七ヶ日の服忌とて道をおくありて兵を  
起し深大寺といハ古城を再興し氏綱へ向て弓矢の企むる  
かりとあるハ則此所のなり

醫王山國分寺 寂勝院と号國分寺村にあり府中より北の  
於十八町を隔り當寺ハ天平年間行基菩薩草創する所  
しハ 聖武天王の勅願所なり中興開山を教心阿闍梨と号  
今ハ新義の真言宗なり  
薬師堂 本多薬師如来 開山行基大士の作なり  
額 塗光明四天 深見玄代山筆

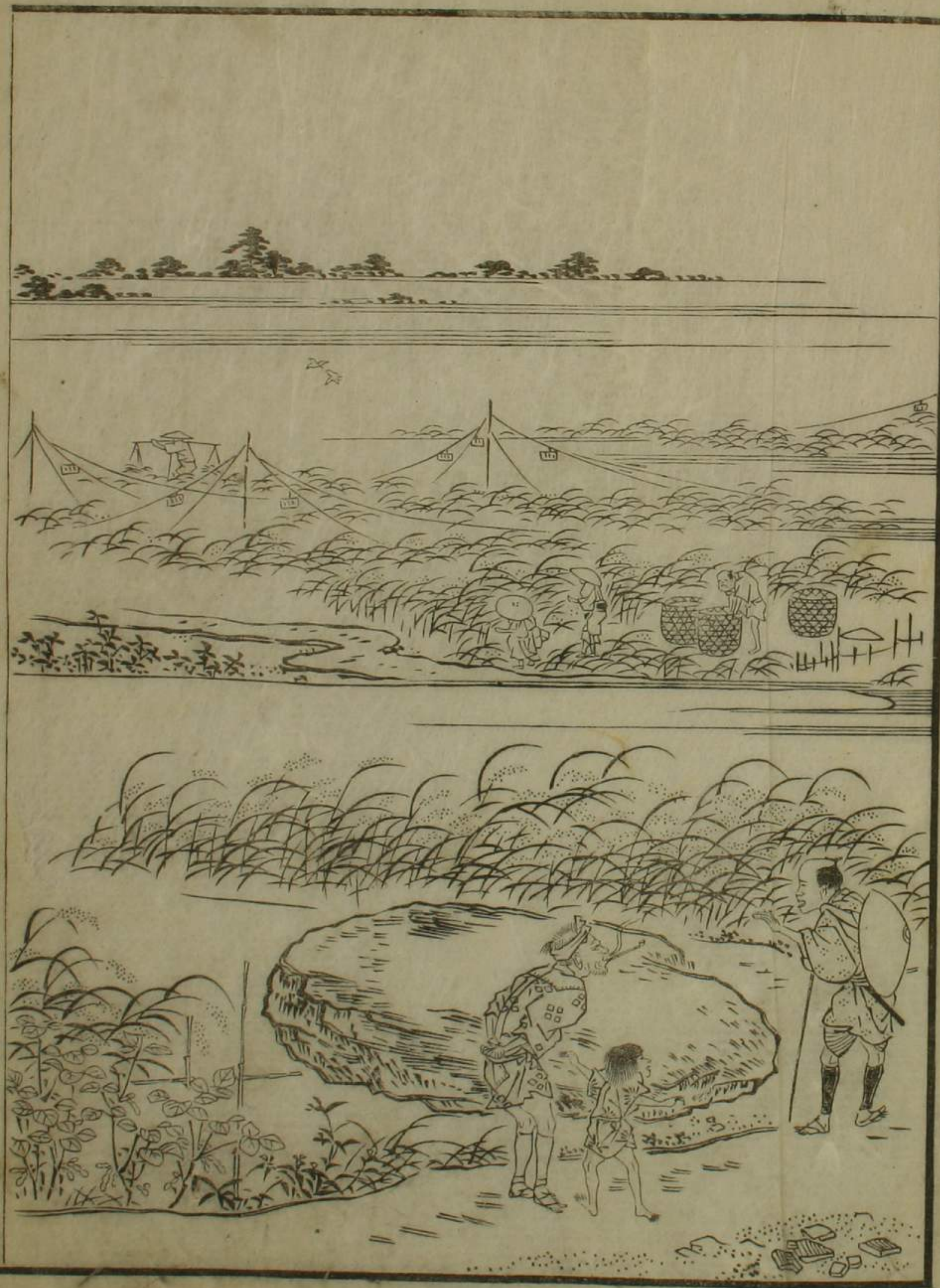




寺分之國







國分寺  
伽藍旧跡





二王門

石階の中腹あり金剛密迹の二像を置作者未詳  
堂林ハ古のこの中へ奮地ハ半丁あり南あり

續日本紀聖武紀曰天平十九年十一月己卯詔天  
下諸國別令造金光寺法華寺下畧各四十萬  
喜式弟二料五六卷東曰藥師寺料四萬二千東梵釋四  
東國分寺七料五百東云藥師寺料四萬二千東梵釋四  
王料七千七百東云藥師寺料四萬二千東梵釋四  
鑑曰建久五年東云藥師寺料四萬二千東梵釋四  
一宮并國分寺五年東云藥師寺料四萬二千東梵釋四  
書曰寬喜三年修復破壞之旨被仰下開東御分國々  
分寺可轉讀云王經之由被仰下開東御分國々  
行然奉行讀云王經之由被仰下開東御分國々

たのこし世をりまを空あつてを分てる寺の影々 称名院

二王門跡

寺前半町ありを隔て南の方の  
畑の中ハ礎石を存せり

層塔旧跡

國分寺の北東南半丁ありを隔てあり草樹繁茂  
の中真を収るものありと云中み徑三尺と云り石あり置ける空穴ありと云

古瓦

二王門跡の辺り數百歩の往の古瓦の破碎せしものあり皆堅密  
の形全くなくとも文練奇中々國分寺の古大伽藍  
想像の形全くなくとも文練奇中々國分寺の古大伽藍

印せしものこみ其形を挙て燈とす

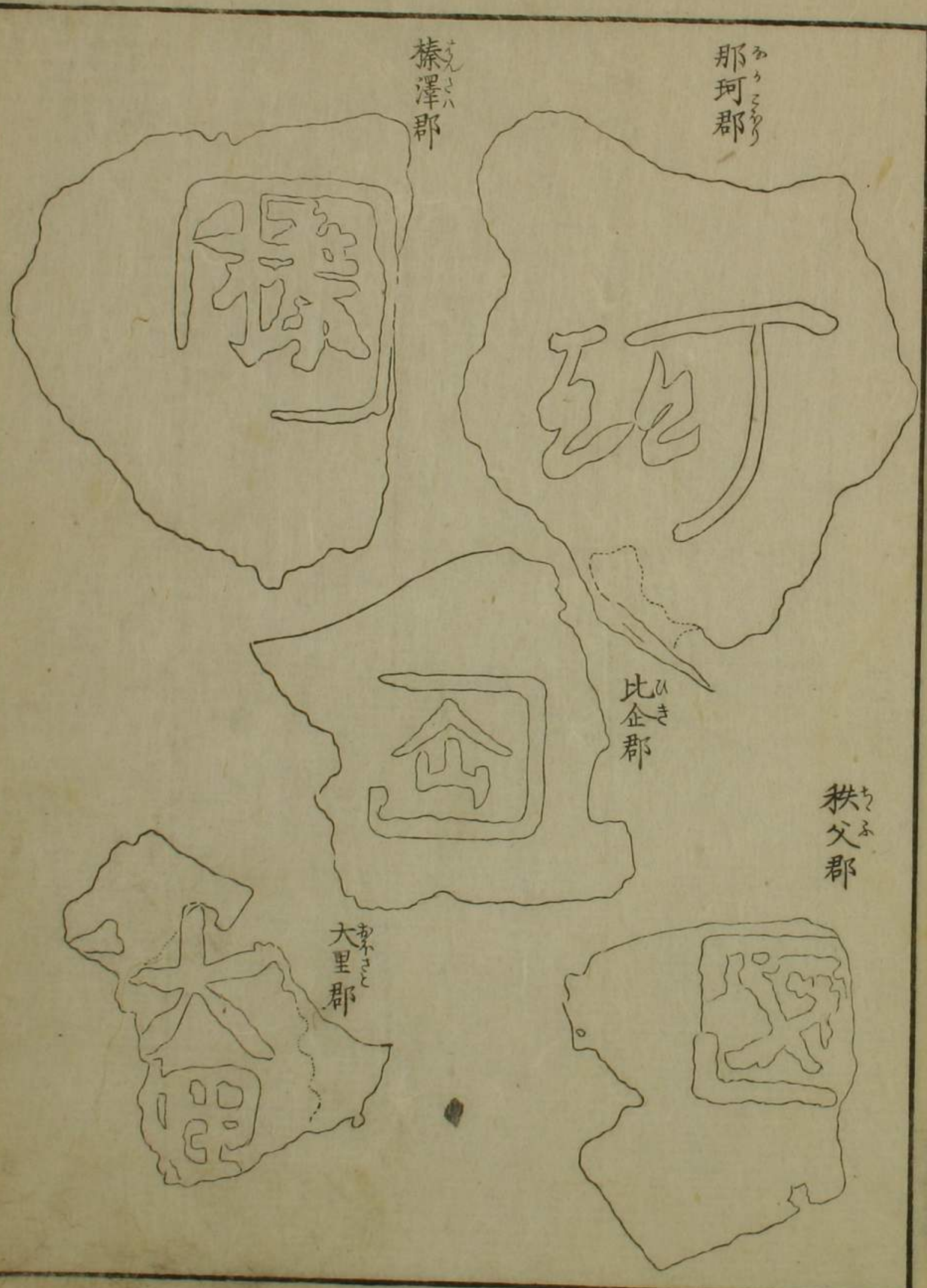
那珂郡

榛澤郡

秩父郡

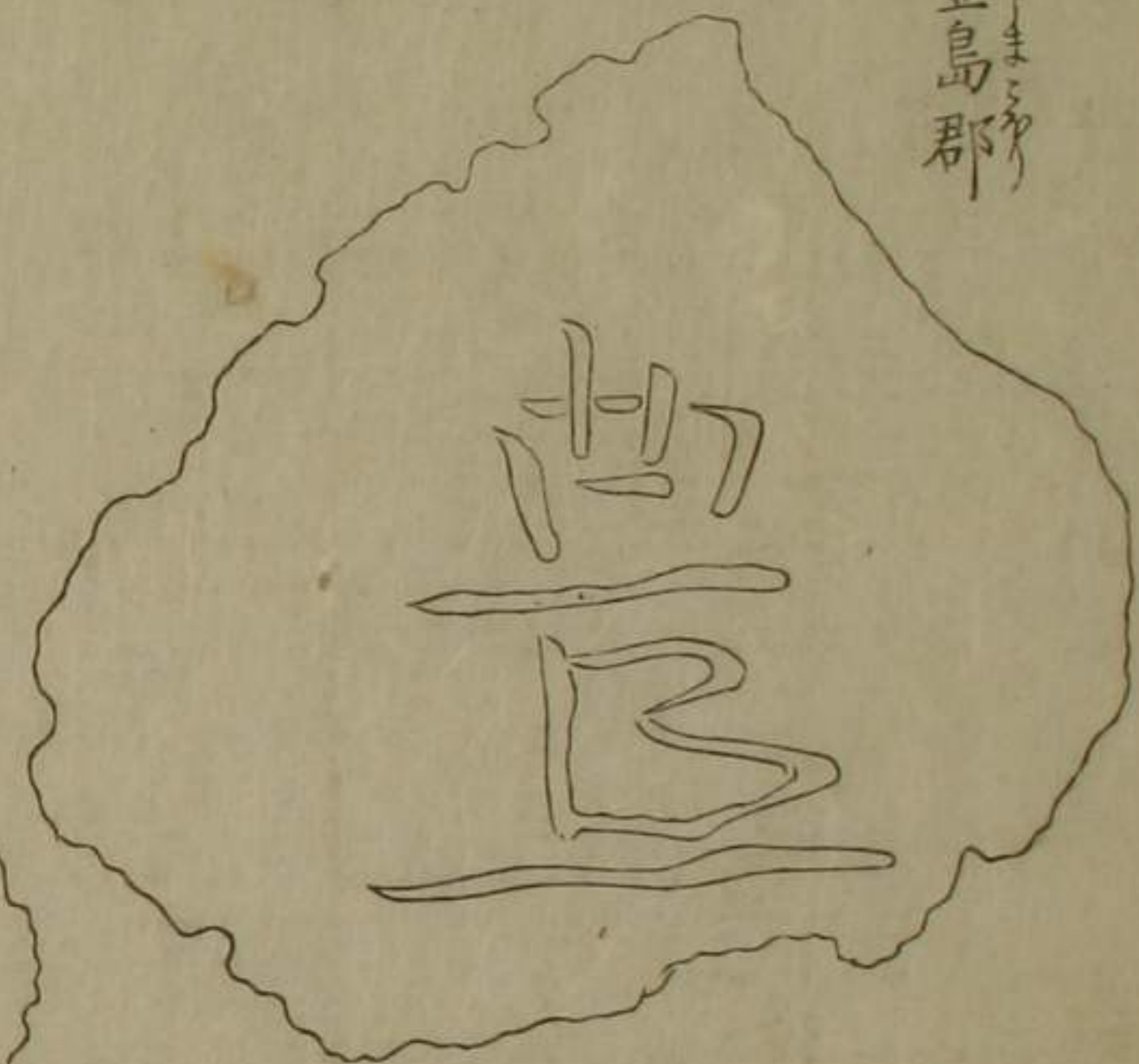
比企郡

大里郡

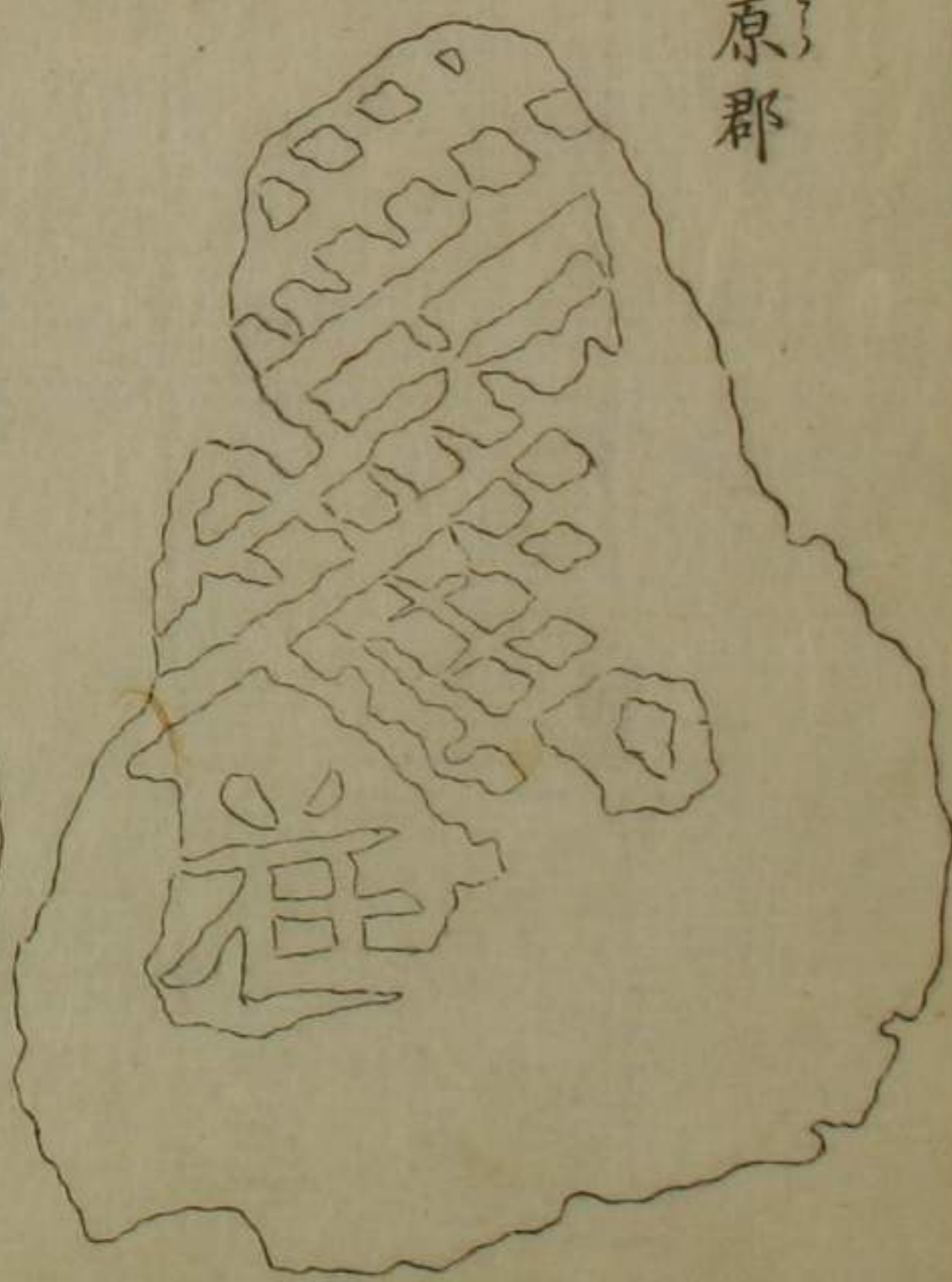




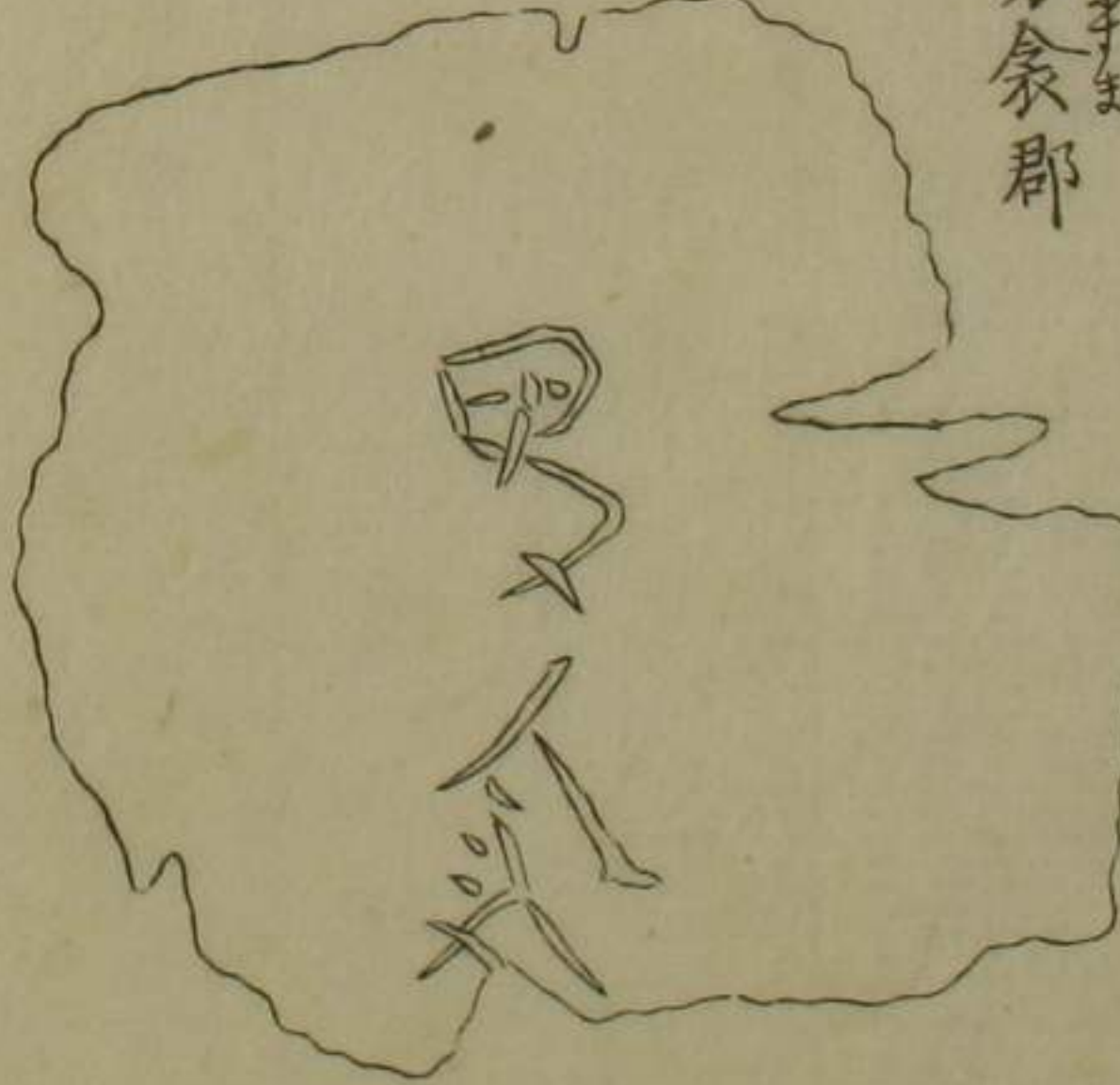
豊島郡



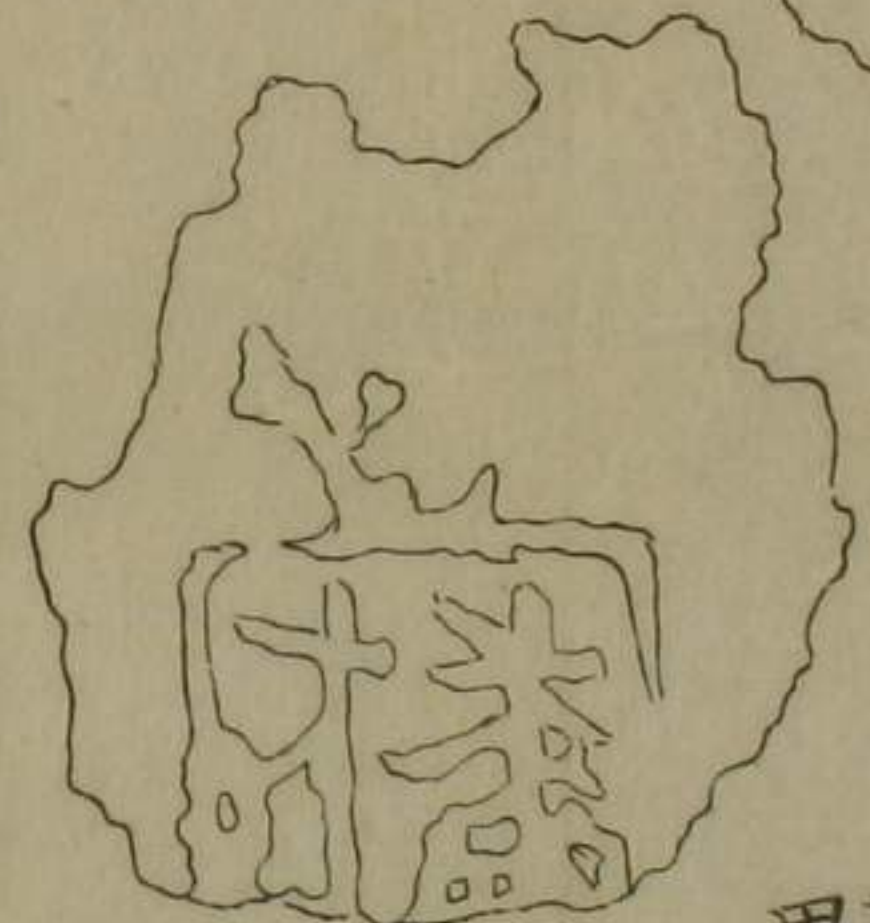
荏原郡



男衾郡



播磨郡



埼玉郡



國分寺碑

薬師堂の前の方より碑文ハ服元雄中英先生撰む

當寺往古源頼義朝臣同義家朝臣奥州征伐發向の頃と

當時へ入りし頃ハ盛大の寺院なり云々此の星霜を

経る元弘の兵火ハ亡びしを新田家より再興ありしも兵革の

世終古は復せり然る宝暦年間権大僧都法印

賢盛衆縁を募り新に醫王閣を營建し傳る所の霊像と

安んずる靈跡を表す今古伽藍の礎石の厳然として田間

阡陌の間は埋もれ懐旧の情を催せり

或人云わつらん食わうけ場ハ頭掛場ありしと依りて古合戦の

後敵方の首級を掛し地なるもハ其傍に食を住居しありし人歟

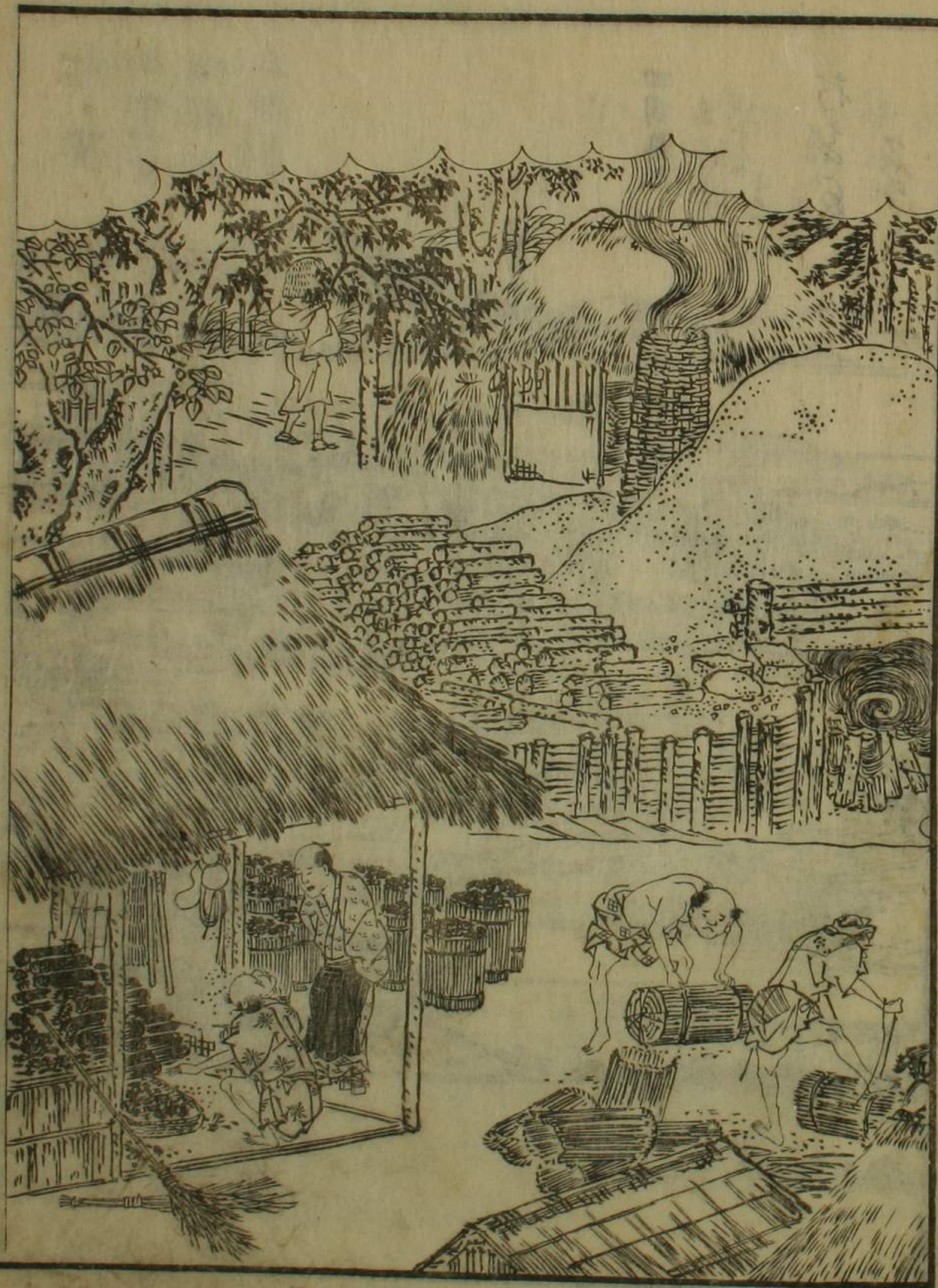
富士見塚 國分寺より西の方五町半を隔つ此所小登れハ一瞬千

里殊よ奇觀なり東ハ浩茫と云々限あり天涯つら小地

接ししを見よの中秋の夕月のあつきわを草より吐く草小入の

古詠よ古を想像し感情少くす此故よ幽人騷客らふ来り







意ノ窟  
 阿弥陀堂  
 傾城松  
 牛頭天王

回國雜記  
 志ノ屋ト  
 山ノ木  
 朽トシ思  
 名ノモ



残ル  
 今モ  
 同也  
 道真准后





遊賞せり 五十歩ありたり

阿弥陀坂 富士見塚より十三町ありを隔て 意う窪村の地北へ

向ひく下坂を云此坂の左に傍る岡小草庵あり土人阿弥

陀堂と称す木像の阿弥陀如来を本尊とす

土人云古の昔もハ銅像あり今府中六所宮の社地にあるとの

是なりとお傳ふ往古畠山庄司次郎重忠此地意う窪の驛舎ハ

中より一頃寵愛せし遊君ありし重忠平家追討よつて西國へ

出陣せし然も其後をこのものありて重忠討死し其由の

ちりまかしくしを實としかの遊君歎そのあり終小自殺し

たりしと後重忠はくあそれと彼遊君う節操と感し菩提の

為よ此阿弥陀堂建立し鏡を以て弥陀如来の像を鑄て安置

せしとの

戀

京師及び鎌倉ホへ至るの驛路ゆく

ありていとあそびしりしとあり

田園雜記 恋う恋うしつとあり

傾城う松 同所良の方八幡宮の社地あり

同程の古松二株

雙立せり土人重忠う愛せし遊君の塚印の松ありといひ傳ふ

然れども社地なるものを此八幡宮の神樹ありし

武蔵野

南ハ多磨磨川北ハ荒川東ハ隅田川西ハ大嶽秩父根を

限とく多磨橋樹都筑荏原豊島足立新座高麗比企入間

等まじく十郡は跨る草より出て草ふ入又草の枕は旅寝此

日數を忘れ向へて里の遙なり杯代々の歌人袂をちゆりし



御入國の頃より昔引く十萬戸の炊煙紫霞とせしふ棚引  
僅より旧跡の残るも兼應より享保に至り四度迄新田  
開闢ありて耕田林園とあり往古の風光これなりされと月夜  
狭山に登りて四隣を顧望せしむるは曠野蒼茫千里無限  
往古の状を想像せしむるなり  
狭山八巻四巻  
の形に入し

萬葉十四東歌

武藏野爾宇良歌可多也伎麻左氏爾毛乃良奴伎  
美我名宇良爾低爾家里  
武藏野乃乎具奇我吉藝志多知和可禮伊爾之與  
比欲利世呂爾安波奈布與  
古非思家波素氏毛布良武平牟射志野乃宇家良  
我波奈乃伊呂爾豆奈由米  
伊可爾思氏古非波可伊毛爾武藏野乃宇家良我

波奈乃伊呂爾低受安良牟  
武藏野乃久佐波母呂武吉可毛可久母伎美我麻  
爾末爾吾者余利爾思乎  
和我世故平安行可母伊波武牟射志野乃宇家良  
我波奈乃登吉奈伎母能乎

新古今  
仍糸をたひひとの波をたふすのありり物も月くを  
續古今  
むさし月の入るさしを屋をうまふかゝるむさし  
玉葉  
旅人のゆくゆくふやまけくをわすれりむさしゆの糸

續千載  
むさし地ハねり事も杜花のむさしあきりあられを  
續後拾遺  
むさしまつこもふハむさしむさしむさしむさしのむさし下ま

新續古今  
むさしのむさしのむさしむさしむさしむさしのむさし

十五番哥合  
むさしむさしむさしむさしむさしむさしむさしむさし  
雅徑

攝政  
大政大臣  
通方  
右大臣  
家隆  
定家  
雅徑



夫木 花のまよひをばし 妻やこれかん 一と世業のまよひの末 為實

回國雜記 むさし 残月をさうめく 道典 准后

桂林集 むさし 桂の長陣せし 時やときひをばし 直朝

武蔵野記行 武蔵野の古奇ハ萬葉集をさしあとし 代々の撰集に餘奇合はひ 其

の集をさしあまのこ 枚舉よつとあつた 世に取られし 其 氏康

武蔵野の古奇ハ萬葉集をさしあとし 代々の撰集に餘奇合はひ 其 氏康

の集をさしあまのこ 枚舉よつとあつた 世に取られし 其 氏康

武蔵野翁 翁ハ其郷姓話らす た 郁芳門院の一 藤士と

云院崩まの 後 齡二十九や 世を避て 諸國を遊歴し

此小止る 菴を結び 月小卧し 武蔵野の 廣を愛を六十年と

徑く 西の法師は 邂逅を 一宿を 扱し 通宵古を 淡く 涙を

緇納 小 澱を 曉小 途て 別る 續扶桑 隱逸傳 西行物語

西行物語 さうとつとをさすとも あれハ 月小卧し 武蔵野の 廣を愛を六十年と

の集をさしあまのこ 枚舉よつとあつた 世に取られし 其 氏康

武蔵野の古奇ハ萬葉集をさしあとし 代々の撰集に餘奇合はひ 其 氏康

の集をさしあまのこ 枚舉よつとあつた 世に取られし 其 氏康

武蔵野翁 翁ハ其郷姓話らす た 郁芳門院の一 藤士と

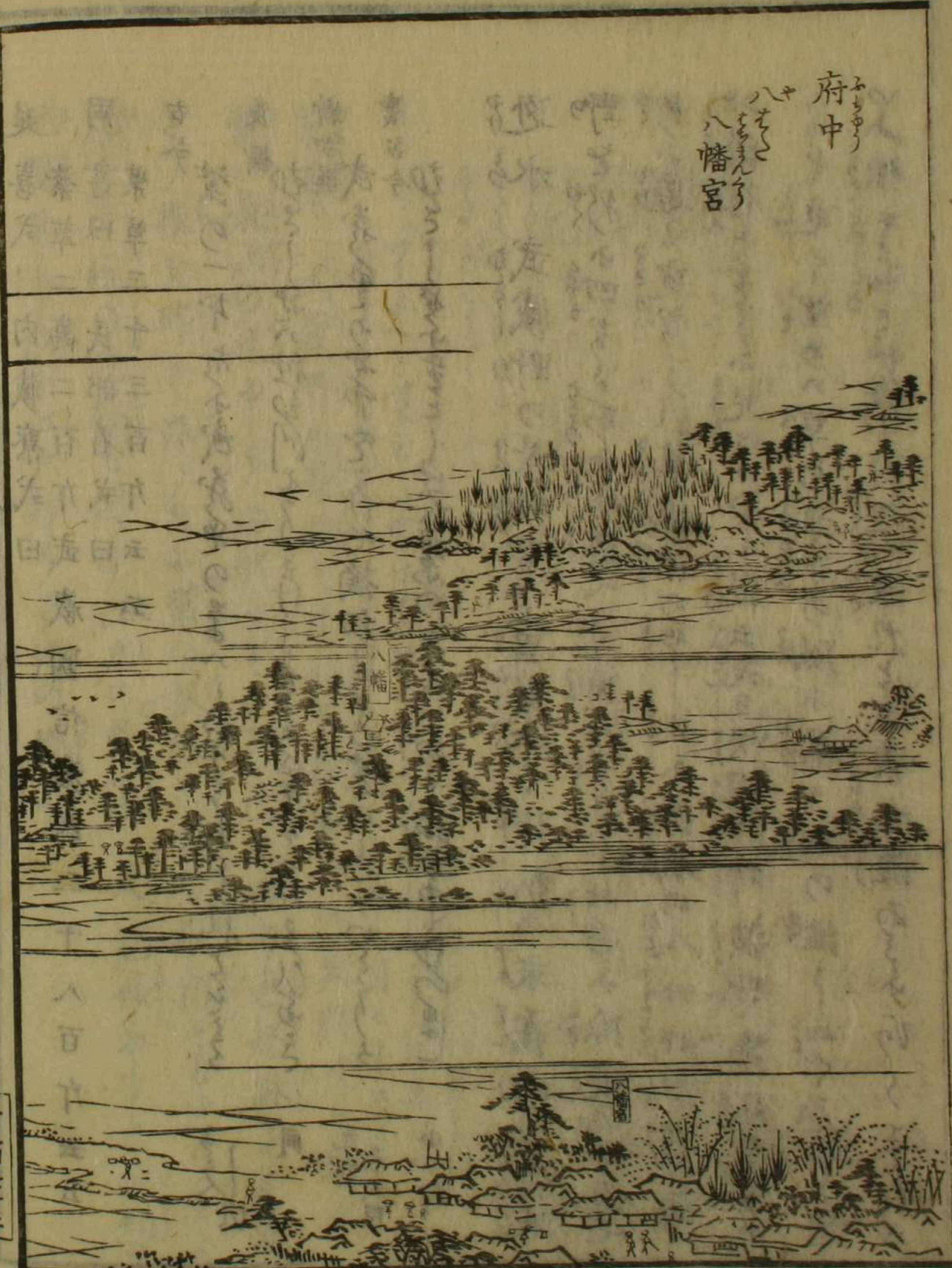
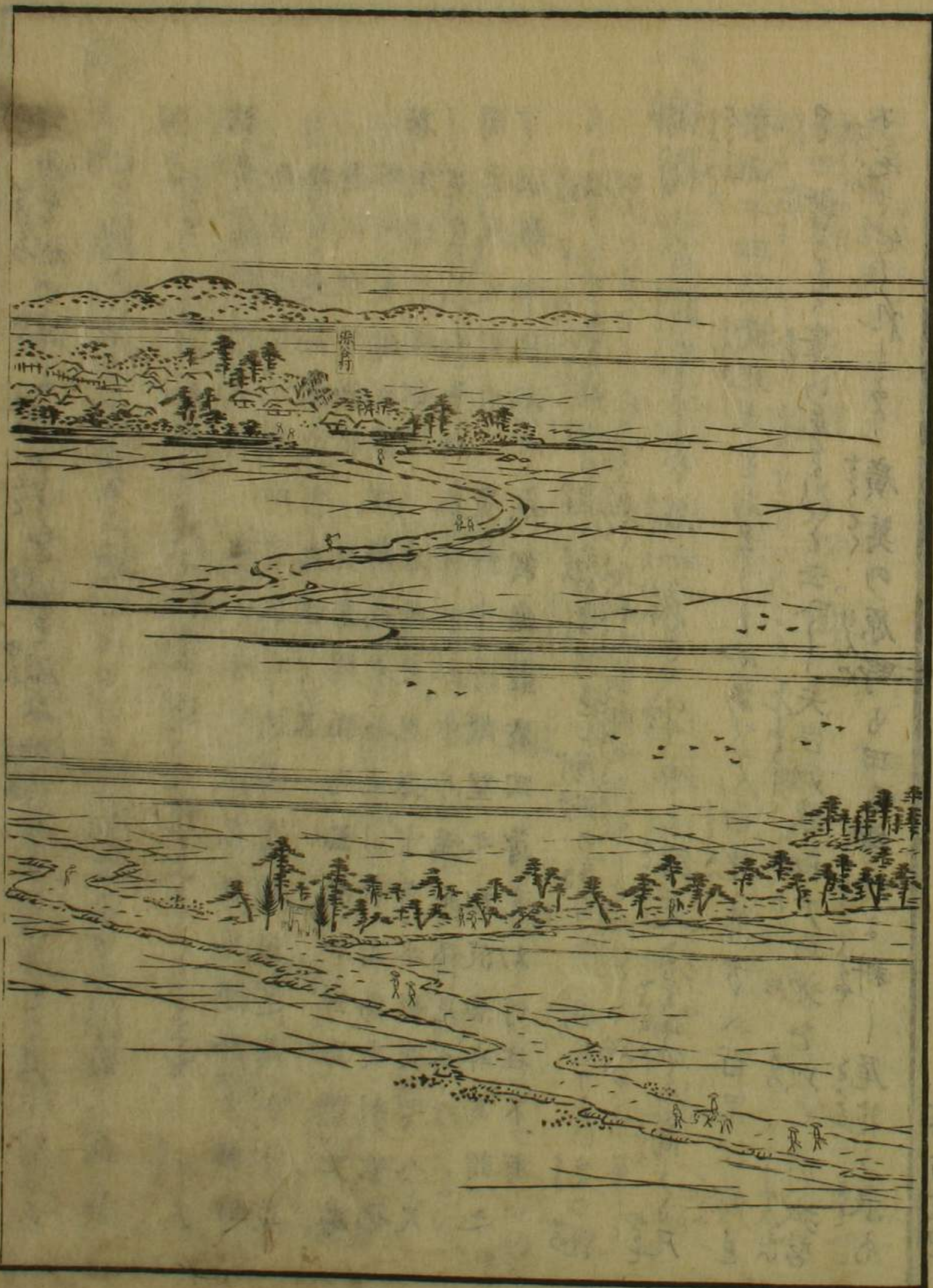
云院崩まの 後 齡二十九や 世を避て 諸國を遊歴し

此小止る 菴を結び 月小卧し 武蔵野の 廣を愛を六十年と









府中  
 八幡宮  
 八幡宮



終小水の原に至るを故に此名ありといふをよきかたき

夫本 夫本ありといふをよきかたき

同 おき一社の名をなすれは水の流れをありとをよき

性 靈集詠陽儀喻 遲々春日風光動陽儀紛々曠野

飛舉體空々無所 有狂兒迷渴遂忘歸速而似水近

無物走馬流川何 處渴極見熱氣如野馬謂之為

運故註智論曰轉 近轉減走馬流川皆有水影長七八尺

唐 陸望志怪錄曰 未如深州鹿中乃前不見水謂之

周 處風土記曰之 氣野中陽望如波濤奔馬謂之

武藏野の勝槩と云々名不の多き中ゆめと殊更よそやのえ高く凡

東西十三里南北十里ありりやあらん日記に四方八百里に餘る

つと書るを筆のそとひと云へて天正以来江戸の地を以て御城營

小定ませしれりあり廣莫の原野も田は鋤畑は耕し尾花う浪も

民家林藪小沿草して万々一を残せしもの

新田開墾より下宿とて此地の傍は原野の形勢を我れり

中秋の頃幽情をあるの草々遊りて終程江戸より十里あま

八幡宮 府中六所宮の末社や甲州街道八幡宿の道より左

あり祭るに應神天皇なり六所宮の神主猿渡氏兼帯奉祀

す相傳 聖武天皇の御宇日域の國に勸精一宮宮を

この皆是八幡村の八幡宮といふ多くハ總社神祠の近きあり

當社も古ハ本社禮殿並に建てる莊嚴蕩々たり平後を

衰蔽よ速ひ今ハ即茅宮小社なり 早年あり前まてハ老杉一株

暴風吹折れ今ハ跡あり又社境圓圍の中は権正といふ

地名あり古の宮守居住の跡ありといふ

瀧の社 當社も六所宮の末社や甲州街道八幡宮より三町あり

東南の方あり祭神倉稻魂大神なり社の傍は少く







飛泉あり六所宮の御手洗池と称せ毎年五月五日大祭の時  
神幸供奉の葦ハ五月朔日より此瀧に浸ると身を清め神夏小  
たのまひと云

石塚社 當社も又六所宮の末社中て同所南の方代小川の辺に

あり祭神磐筒男命磐筒女命二座なり

府中驛舎 甲州街道の官驛中て江戸日本橋より七里 布田あり

日野へ二里 旅舎多し 新宿本宿番場 舊名を小野縣と称せ武蔵國

八丁あり 府中て上古國造居館の地あり和名類聚抄中武蔵國府を

多麻郡とありと載り徴とせへ延喜延長の頃一變して此辺

をへる小川郷と稱す 風土記曰小川郷公穀二百六十七束 又其後小野小

川の称止て府中領と總称を尚此郡玉川を境とて川南を多

西郡川北を多東郡とも稱しとて古文書に云々

越前越後皆  
府中と稱せり

常陸對馬長門



